

THEATRE & POLICY
通巻 73 号

THEATRE & POLICY

若い世代のための戯曲を探して

TPN Plays & Players



海外の優れた戯曲を紹介することを目的とした創造ユニットを立ち上げ、いま1年を迎えようとしている。7月の東京と沖縄での公演の準備を進めながらも、次を模索しはじめていると、少しばかり自分のなかに揺らぎがあるのに気づく。若い世代のための演劇体験とは何なのだろうか。演劇から何を欲得欲しいのか、演劇を見るということはどういう体験なのかへとつながり、とどのつまり、「演劇とは何か？」という大命題にいたって行き詰まる。どうも「児童青少年演劇」というカテゴリーをいったんきれいに忘れて考える必要があるようだ。

「シンプル・イズ・ベスト」という信念と、直球すぎる教条的、お説教的メッセージは勘弁してほしいという思いに揺らぎはない。飾る演劇は溢れている。装置が、衣裳が、照明が、音響が説明し過ぎる演劇も少なくない。直球すぎるメッセージはわかりやすいが、飾る演劇同様、想像力の余地を残さない。いや、むしろ一切の想像力を許さず、(劇作家の、演出家のヴィジョンを)「受け入れろ。どうだ!？」という演劇は多い。頼むから、自由にさせて欲しい。この意味において、「黄色い月」&「宮殿のモンスター」の劇作家ディヴィッド・グレイグは説明を許さない構造をクリエイターに対して突きつける。飾りたい、説明したいという誘惑を覚えるものの、説明するために飾り始めると演劇的構造が崩れる。怖い戯曲である。しかし、なぜいま、この演劇でなければならないのか? 面白いから、やりたいからだけでは十分ではない。

大命題に真っ向から取り組むと、かえって自己満足を生みだしやすい。要素に落とし込もう。まずは、文化や社会的なコンテクストを扱った作品であること。難しくてもいいのだと思う。興味が湧き、わかりたいという仕掛けがあればいい—わからないという体験をしない限り、わかろうというモチベーションは生まれない。海外の戯曲との出会いが思考を刺激し、社会を、人間を理解したいというモチベーションが生まれるもの…。差異や同一性を見いださるもの…。また、様々な演劇スタイルを求めるもの。演劇は一つのスタイルではない。さらには、観客を単なる客に、傍観者にしてしまう額縁舞台ではない環境…。望ましいと思われる要素をリスト化しながら、戯曲を探す。自分のなかの演劇なるものを、ときに否定してかからなければならない作業でもある。リスクを冒さなければクリエイティブにはなれないし、演劇という遊びは徹底的に面白くならない。それを心しながら、戯曲を探す。思い至るのは、圧倒的に条件をみだす戯曲は海外においても少ないということ。だから海外のクリエイターたちも悩んでいる。それを分かち合うのも一つの過程なのだろう。

芸術監督 中山 夏織

「ナシャ・クラサ」とエデュケーション・プログラム

中山夏織

文学座アトリエ公演『ナシャ・クラサ』に関連して、ひょんなことから二度にわたり、いわゆるエデュケーション・プログラムをもつ機会を得た。

一つは、ある子ども劇場の定例会の貸し切り公演に先立って、希望者に対して、1時間強のプレ・ワークショップを行ったことである。観劇された方々のほとんどが「救いのない」と口にするほど、ポーランドで起きた悲劇の現代史を重く、熱く語る公演内容である。その観劇に先立って、観客となる人々に対し、どんなワークショップが可能なのか。観劇に何ら支障をきたすのではなく、どこか鑑賞の手助けになる仕掛けは作れるのか。教育的なテーマは多々見いだすことができるものの、お勉強、教条的に陥らないバランス、演劇を体験することでしか得られない経験...主催者、文学座との打ち合わせを経ても、参加者の顔が見えてこないこともあるが、最後まで悶々としながらワークショップの日を迎えた。

最終的に選んだテーマは、「理不尽な理由による差別」と「名前というアイデンティティ」。昨日までの友が、一瞬にして敵に変わる。自分では選びようのない理由によって、支配するものと支配されるものに、加害者と被害者にかわるという構造をということ。さらに、その支配するものによって、名前が奪われるということを探るワークショップとなった。

ウォーミングアップのゲームも、この二つのテーマを探るための準備、つながらものを選んだ。そして、少しだけ「ナシャ・クラサ」の背景を、ポーランドという国のコンテキストで紹介しているときに、アシスタントとしてワークショップに加わってくれていた西村俊彦さんが、いきなり独裁者として、法を司るものに姿を変え、参加者に高圧的に命令し始めた。選びようのない理不尽な理由によって、参加者を強圧的に二つのグループに分けた。ティーチャー・イン・ロールである。

実のところ、彼には事前にこの構造だけは説明したが、何を「理由」にするかは参加者を見てから自分で決めて欲しいとお願いしていた。参加者をひたすら観察した末に彼が選んだ「理由」は、まさに「理不尽かつ選びようのないもの」だった。また俳優だけあって、役を維持することに揺らぎがないことが、最初戸惑っていた参加者たちに、次第に「いま演劇の中にいる」「演劇の中でのことだ」「だから遊んでいいのだ」という感覚をもたらした。く

すくす笑いが消えて、演劇という約束事が確立したところから、2段階での静止面を作った。時間があれば、もっと深めていくことができるのだが、1時間で行えるのはここまで。だが、暗い気分の演劇の中に取り残して終わるわけにはいかない。おしまいの儀式として、再び皆が声をあげて一緒に楽しめるゲームをしてお開きとなった。

二つ目は、オーストラリア演劇の翻訳家の佐和田敬司教授に招かれ、早稲田大学で「ナシャ・クラサ」を活用しながら、「翻訳」と「演劇の社会的役割」をテーマにレクチャーする機会を得た。法学部の少数の学生たちが対象だが、学生たちはすでに公演を観劇している。法学部ということもあって、著作権を絡ませ（実際に今公演の大問題はそこにあった）、また、本来、アートマネジメントの教師であり、プロデューサーである私になぜ翻訳に携わることになったのか、その理由などをひもときながら、ときに、マネジメントや文化政策、演劇教育の概念をとりいれながら、一見、相容れるようには見えにくい二つのテーマをつなげるレクチャーに挑んでみた。なぜ児童青少年に演劇の鑑賞機会が与えられなければならないのか？

学生たちの反応はヴィヴィットで、話すこちらも楽しかった。話しながらはじめて自分の中で腑に落ちるものもあった。最後に学生から「演劇って何なのですか？ 多くの先生に質問してきても、『じゃあ君はどう思う？』と返されて、誰もちゃんと答えようとしてくれないのですが」と質問を受けた。究極、かつ、終わりのない問い。だが、答えられる範囲で、私にとっての「演劇」を、文学との違いや、社会性という視点からの事例を交えて答えてみた。十分な答えではなかっただろう。だが、真摯に問う学生に対して、一人の演劇人として、煙にまくのではなく一つの視点を提示してみたかった。

演劇とは遠い昔、一回性のものだと大学1年生のときに学んだ。だが、その一度の体験の遭遇が、長く刻まれ続けることも、また、その人の人生を大きく変えることもある。社会すら変える機能も持つ。だからこそ自分に選べない理由で疎外してはならない。この原点を、改めて感じ、考える機会を頂いたことに心から感謝したいと思う。

(なかやまかおりノドラマ教育アドバイザー)

原発のことを考えた！ — 教職総合演習でのドラマ実践

上田 真弓

1990年に公開された黒澤明監督のオムニバス映画『夢』¹の中に「赤富士」という話がある。冒頭、人びとが混乱して逃げ惑っており、その向こうに爆発で赤く染まる富士山が見える。しかし爆発したのは富士山なのではなく原子力発電所だという。群衆は逃げ、海のふちへと追い詰められる。やがて、爆発は収まり静寂が訪れるのだが、そこに色のついた煙が流れてくる。広がる煙を指して男が言う。「あの赤いのはプルトニウム 239、あれを吸い込むと 1000 万分の 1 グラムでも癌になる。」「黄色いのはストロンチウム 90、あれが体中入ると、骨髄に貯まり白血病になる。」「紫色のはセシウム 137、染色線に集まり、遺伝子が突然変異を起こす。」色つきの煙は放射性物質であり、放射能は目に見えないから危険だと思われる、着色技術が開発された結果がこの「色」だというのである。無論、これはフィクションであるが、放射性物質がもしも着色されていたならば、今起きている問題の半分以上が何がしかの結論を持って決着していたのではないかと想像する。食べ（させ）るのか食べ（させ）ないのか、逃げるのか逃げないのか。そうした決断に対して、互いに善意をもとに断絶するような事態をまねくのではなく、もっとそれぞれの意志や決断を尊重できたのではないだろうか、と思う。

無味、無臭、無色である放射性核種は人間の五感によってその有無を判定することができない。また、人体へのとりこみによってどう影響を与え、それがどういった健康被害を生み出すのか、また、その因果関係をどう証明するかについて、学者によって見解が違ふ。放射能の持つ特質から、特に低線量被曝²に関しては、今後も科学的にひとつの「正解」が示されそれについてだれもが納得するということはないだろう。放射性核種が人体に与える影響は、原因を確定することが難しく、そこに解釈の余地が常に残るからである。そうならば人は、自分や自分のまわりの都合で自分が選びたい解釈を選ぶことになるのではないだろうか。

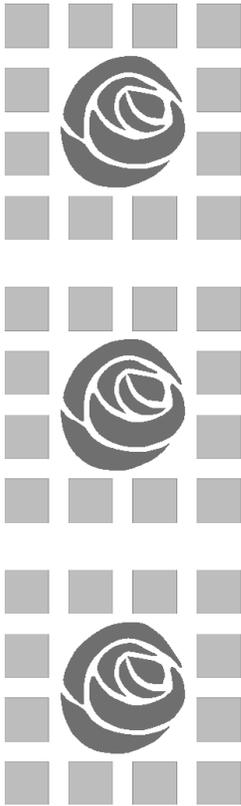
この解釈の余地がある中で、政府が信頼に足る決断を下さなかったことによって、原発の問題は複雑化し続けている。可視できないのは、放射性

物質だけではない。

情報もそうだ。特に、事故後の数ヶ月、多くが伏せられ、または歪曲して伝えられていた。その結果、ただ漠然とテレビを見たり新聞を読んだりしている人が「マスメディア」からの情報のみによって認識している事実と、自ら情報を手に入れようとする人が認識する事実は異なるものとなっていた。数ヶ月遅れで発表されたメルトダウンの事実や提供されなかった SPEEDI の情報など、命にかかわる情報が必要なときに適切に知らされてこなかったことは、今ではすでに人びとの知るところになっている。

前置きが長くなったが、原発についてドラマを通して考えるという授業実践を紹介したいと思う。この授業は、情報がいま以上に錯綜していた昨年 6 月におこなった。筆者は、沖縄の総合大学で非常勤講師として教職総合演習³の授業を担当しており、ドラマを軸にした授業を担当している。少し背景を書くならば、この大学は 2004 年に米軍のヘリコプターが校舎にぶつかり炎上したことで知られることになった大学であり、基地に隣接している。戦闘機の飛ぶ音で授業が中断（飛び去るまで）することも珍しくない。沖縄には原子力発電所がなく⁴、今回の福島第一原子力発電所から、国内では一番遠い場所に位置している。その距離のせいもあるだろう、事故に対しての切迫感がなくのんびりしている、また、放射能に対する関心も知識も概ね乏しいと感じていた。実際にはどうか。授業の一週間前にアンケートをおこなった。「来週、なにごともしなければ、というのは、大きな余震が来たり、なにか新たな損傷が起こったりということがなければ、原発についての授業をしたいと思う。でも、例えば、私（1969 年生）の世代ならば、原発の事故と聞いたらすぐにチェルノブイリのことを思い出して、怖がったり比較して考えたりする。でも、みんなはそのときまだ生まれていない。みんなが今、なにをどう考えているのか、何を知っていて何を知らないのかが分からないので教えてほしい。」と前置きをしてアンケートを配った。いつになく学生たちがしんとして真





面目に書き込んでいたのが印象に残る。アンケートは、日本の原発の数や立地場所についてなどの基本的なことや放射能や原発に関する知識についての問い、また、「風評被害」や「避難」をどう考えるかといった意見記述などで構成した。結果は、基本的な知識についてはまんべんなく誤答が並んだ。他方で、風評被害についての考え方や、原発が安全かどうか、メディアの情報についてどう思うかといった部分の質問では、学生によって回答に差が現れ、彼らひとりひとりの普段分らなかつた背景や社会とのつながり方の一端が見えるようであった。また、彼らが実は、今の状況に対して不安を感じたり、知りたいと思っているということが伝わる書き込みが多かった。これらの回答も参考にしながら、授業の軸は、今の状況がどうなっているのかを伝えながら、それらの知識について自分とは別の立場に立って考えてみることにした。そうすることで、自らの立ち位置がより鮮明になるのではないかと考えた。また、学生に断りを入れた上でレクチャーの時間を長めにすることにした。当時の、安全側に大きくシフトした報道が大半であった状況で、アンケートの回答もあわせて考えるならば、限られた時間ではドラマの体験以上に状況を把握することのほうが優先すると考えたからである。授業は以下のようにすすめた。

1) リーダーあて（震源地）ゲーム（歩きながら）

これは、リーダーの動きを周りの人が真似をして歩き、リーダーが誰なのかを知らないオニがそのリーダーをあてるというゲームである。ここでは、この場を村と設定し、リーダーは村の長、そして、オニを「よその」とした。「よその」はその村でうまくやっていくために出来るだけ早くリーダーを見つけ出して、その場にそった動きが出来るようにしなくてはならない、と促す。また、村で浮いてしまわないように、自らも同じ動きをしながら、リーダーを探す、という物語を付加しておこなう。この日は、一人目のリーダーがあまりにあっさり見つかったので、作戦を考えてもう一度やった。これはウォーミングアップであり、ドラマへの導入である。同時に、周りと同じであることや、周りとは違うということに関して身体感覚で安心や不安を感じる体験をすることも目的としていた。

2) 資料配布、レクチャー

今回、授業をおこなうにあたって、次のような資料を使って配布した。電力会社の仕組み、原発の仕組み、放射線核種とはなにか、などという基礎情報の図解資料、風評被害、チェルノブイリ事故の被害、核廃棄物の処理のそ

れぞれについて書かれた文章、放射線について発表されたさまざまな情報を「ベクレル」と「シーベルト」に分けてそれぞれ列記したもの、である。図や表もあるが、文章も多い。これらの資料は、限られた時間で読み解くには多すぎる量である。しかし、今、私たちがおかれているのは、まさにそういう社会なのである。つまり、これらは、内容だけに意味があるのではなく、分量それ自体が意味を持つという性質のものである。

アンケートに「原発がある事自体でその自治体は利益をもらっているわけだから自治体の責任だと思う」と書いた学生がいた。その話をレクチャーの途中で、みんなにする。そういうふう考えることが出来るかもしれない、でも、これはなにかに似ていないか、と言うと、学生の一人が、「基地。」と言った。そのとき、遠くの危険な原発と近くの危険でもあり危険の一言では表しきれない存在である「基地」がつながって考えられることになった。

3) 立場カードを配る

「私は〇〇です。今必要な物は（ ）で、私が一番大切にしているのは（ ）です。」と書かれた立場カードを配る。〇〇には、それぞれ、「原発を推進する学者」「放射線量が高い学校に勤める教師」「(福島県に住む)避難することを決めた家族」「(福島県に住む)農家・酪農家」「政治家」「東電社員」が入っている。個人で見てもらい、()内をそれぞれ記入してもらおう。それから、仲間探しをおこなう。この仲間探しは、互いに利害関係が衝突する場合があるので、できるだけ自分の立場を伏せながら、当たり障りのない会話を通して自分の仲間を見つけてほしい、という指示を出した。仲間を見つけてから、改めて、資料を見ながら、自分たちの立場にとって必要な情報、都合のいい情報を選び出していくという作業をする。漫然とした情報が、自分の立ち位置が変わることによって、必要／不必要、信じたい／信じたくない、として取捨選択されていくということを体験してもらおうとした。このあと、グループごとにメッセージを伝える、というところまでおこなうプランだったが、実は、ここで時間切れになってしまった。メッセージは、宿題として書いて提出してもらうことにした。申し訳なかった。

受講した学生の感想を紹介したい。原発を推進する学者という「立場」を引いたのは、宮城県出身の学生だった。「原発を推進する学者の立場になって考えるというのは思ったよりも難しく感じた。」という。それでも想像

して、「しかし、研究を職業として、原発を推進する立場である以上、その安全性や経済性などメリットを提唱し続けなければならない。養う家族がいたり、高い社会的地位や守るべき名誉があったらなおさらだと思う。」「原発を推進する立場として、いまは一刻も早く、避難している人びとに十分な保障をして、地域住民をはじめ国民に原発のメリットをわかりやすく説明して原発を再稼働させる必要があると思う。その上で、学者が必要とするもの、気がかりなことは、今後、研究を続けていく機関が存続していけるかどうかであると思った。」と書いた。また、原発の授業の前の週に昔話を使っておこなった授業とつなげて考えたという。それは、想像したり表現したりすることを中心に国語の読解につながるようにと組み立てた授業だ。詳述はさけるが、特に原発につなげることを意図していない。しかし、学生はこの授業だけで完結するのではなく思いを広げて解釈し、より深く思考することになった。

半期の授業がすべて終わってから、学生に授業を振り返るインタビューを行ったのだが、その中で、一番印象に残ったのは原発の授業だったという学生が何人かいた。そのうちの一人は、「あれは時間が足りなかった」と言いながら、あのころの環境について教えてくれた。先生たちがはっきりしないことが不満だったという。彼女のゼミの先生は、東京電力の事故が起こってすぐ、とにかく近くに知り合いがいるなら逃げる言うようにとゼミの学生に連絡をまわしたという。しかし、その学生にとってはそれ以外の先生たちのスタンスが伝わらず、どっちつかずでうやむやにされていると感じており、報道に対しても釈然としないという状況だったという。そうしたなかで、筆者の授業について「私は調べてこう思う、って言ってくれる人がいた時に、あ、自分も自分なりに考えたり調べたり、自分はこう思うって言っているのは、自分のなかですごく思いました。」と話した。「あまりにもタイムリーだし、デリケートな部分もあったから、被災している人がいるから。言っているのか言っちゃいけないのかってところで、みんな迷ってた、それでも言わなきゃいけないこともあるんだっていうのを、気づかせてもらった。」「だから、あの資料は今もとってあります。」と彼女は言った。ただこちらの意見を伝えるのではなく、状況を提示した上で、根拠を示しながら考えを伝えるということが、彼女にとっては信頼出来る手段であったのだという。原発について、またはそれにまつわる社会のできごとについて、といったら飛躍しすぎだろうか、とにかく、彼女は少なくともひとつの社会の出

来事である原発について、この授業を通して自分が語ってもいいんだという許諾を得たのである。

情報を手に入れようとすれば、さまざまなアクセス手段がある。しかし、ただ、そこから何を選びとり、どう判断していくのかについては、自己責任に委ねられかねない。また、他方で、ただ漠然と自然に入ってくる情報だけを頼りにしていれば、容易に事実から遠ざけられてしまう可能性がある。政府というのは嘘をつくのだ、ということが、1年以上の歳月のなかで白日に晒されたのだ。うすうす知っていたけど、本当にそうだったんだ、ということが自明になった。そのなかでどう折り合いをつけて、判断をするのか、判断のための基準をどこに置くのか、そこには他者やその立場を想像することが出来る力が必要になるだろう。

例えば、放射性物質に色をつけるような想像力によって、ものごとはいまよりは透明度を増して判断出来るようになるのではないかと思う。ドラマを体験することがその一助になるのではないかと、私は思っている。

(うえだまゆみ／俳優・沖縄国際大学非常勤講師・
琉球大学教育学研究科修士課程在学中)

¹ 黒澤明監督『夢』、黒澤プロダクションズ製作、ワーナー・ブラザーズ配給、1990年公開。

² そもそもどこからが低線量なのか、被曝による疾病か否かの判断、何をもって健康への影響とするのかについての見解が学者間でも分かれている。例えば、東京大学医学部附属病院放射線科の中川恵一は、自然被曝が世界平均で1年間に2.4ミリシーベルトであることなどをあげながら、100ミリシーベルトの蓄積以上でなければ発がんのリスクも上がらず、危険が高まったとしても100ミリシーベルトの蓄積では極めて僅かな増加と考えられるという。他方、米科学アカデミーは、放射線被ばくは低線量でも発がんリスクがあり、職業上の被ばく線量限度である5年間で100ミリシーベルトの被ばく(外部被ばくを指す、筆者注)でも約1%の人が放射線に起因するがんになるという報告書(2005年6月)を出した。内部被曝に注目すると、琉球大学名誉教授の矢ヶ崎克馬は百万分の1グラム程度の摂取量で1シーベルト程度の被曝になり、少量の吸入でも確率的に発がんにつながり、十万人当たり数十人のがん死亡者を上昇させると試算。

³ 教職課程の学生が3年次に必修で受講する。F日本における一つの問題についてさまざまな角度から学ぶことを旨として半期のコースで開講される。今回取り上げているのは2011年度前期の授業で、24人の学生が受講。



スタニスラフスキイ・イン・エデュケーション★2

中山夏織

私のスタニスラフスキイ理解は一文献をそれなりに読むけれど、それ以上に、俳優トレーニングの指導者や、演出家、ドラマ教師の通訳としての経験に負う。仕事をしながら学ばせていただけという意味では、役得であえる。なんといっても醍醐味は、ベーシックを理解し、消化したうえで、個々演出家らの展開、つまり応用の在り方の多様性である。それが実に役に立ち、面白い。というのは、わかったつもりでいても、実際には、その本質をわかっていないかったことを明らかにし、ストーンと腑に落としてくれるからである。同時に、一人の指導者からだけ学んでいては十分でないかもしれないことも教えてくれる。それにしがみついでしまい、応用しうる可能性を閉ざしかねないからだ。もちろん、生粋のスタニスラフスキイは「家元」であり（「宗教」でもあるだろう）、根幹を適切に理解することなしに、応用するにはいたらないことを忘れてはならないのだろうけれど。

2010年秋、文学座で行われたドミニク・クック（ロイヤルコートシアター芸術監督）のワークショップの際、応用からストーンと腑に落ちたことがある。「イベント（出来事）」と「オブスタクル（障害）」の差異である。ロシア人の先生の通訳をした際、若干戸惑ったのがこれだった。オブスタクルは乗り越えうるが、イベントは乗り越えられない…。横文字が適切に訳しきれない。わかるようでわからなかった。母国語ではない言葉での指導だったゆえかもしれないが、違和が残った。ドミニク・クックの解釈、そして説明は、シンプルに「イベントはその舞台上の人物全員に影響を与えるもの（台詞、アクション、効果、登場・退場、事件）」だということだった。通訳しながら、その瞬間、ビリヤードの玉がはじけるのをイメージが浮かんだ。オブスタクルという言葉にはクックは一切触れなかったが、『カラムとセフィーの物語』の一シーンを活用しながら、一人ひとりの登場人物の「目的」がその人物にとってのオブスタクルから生まれるものだというのを教えたように思う。そうだ、イベントは否が応でもそこに存在する人々に共有されるが、オブスタクルというのはハードルであり、多くの場合、個人的なものなのだ…。少年と少女のたわいのない会話のなかに、二人の共有されないオブスタ

クルが、二人にそれぞれの目的を生じさせ、それがすれ違うことから次のさらに高いハードルとなり、ドラマが生まれて行くのだと理解した。

アクション—行動—ということ

「与えられた状況」と「目的」だけではドラマにならない。オブスタクルを解決するための目的が「アクション（行動）」を導き出す。What I do—私は何を行うのか。

アクションは、大きく内面的行動(inner action)と外面的行動(outer action)に分かたれる。シンプルに言えば、内面的行動は精神的であり、外面的行動は身体的なのだが、ニック・オブライエンの言葉では、内面的行動は「我々が目的を達成するために実際にしていること」だとし、一方、外面的行動は「我々が他者に我々がしているのを見て、我々がしていることについて考えて欲しいこと」である。「外面的行動は、内面的行動のカバーのような役割を果たす」というが、とにもかくにもわかりにくい。そこで事例にあげているのが、「恋人と別れたばかりのホテルの受付係が、これから8時間働かなければならない」という状況である。この場合、「務めをきちんと果たす」のが外面的行動であり、「自分を憐れむ」が内面的行動かもしれない。そこにやってきた宿泊客が、何かおかしいぞという印象を受けたとしたら、その宿泊客は、受付係の内面的行動をキャッチしたというわけである。少し見えてきたが、まだ腑には落ちるにはいたらない。

ここで登場するのが、「サイコ・フィジカル(Psychophysical)」という語である。「心理身体的」。つまり、アクションが単に身体的なだけでなく、心理的性質をもつということ。考えていることと、実際に行うことのコンビネーションということである。

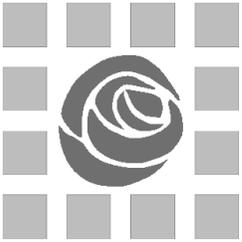
これを練習するエキササイズとして、シンプルな「動詞」が用いられる。その動詞（アクション）と、「与えられた状況」を、即興をもちいて演じるのである。



(エキササイズ 1)

1. 動詞：分ける。与えられた状況：ケーキを切り分ける。
2. あなたの前に 1 個のケーキがある。あなたはそれを他の誰かと分け合わなければならない。公平になるように分けたい。いまナイフを手にし、ケーキを切り分ける。「与えられた状況」をふくらませ、アクションへつなげる。
3. 見ていた観客（クラス）は、次の視点からコメントする。

- 意図したアクションをしていたか？
- そのアクションは信じられるものだったか？
- 観客として、俳優の心と体が、アクションに統合されていたと思われたか？
- 切り分けたケーキが同じサイズのように見えたか？



(エキササイズ 2)

ある状況のもとで、人がなにかをしているのを観察し、それに見合う「動詞」を探る。例えば、スーパーマーケットで、自分の前の女性が置いてあった箱のへりで向こうずねをぶつけた。女性はふり返り、「なぜこんなところにあるのよ」言い、箱を蹴飛ばした。この女性の動詞は、「文句を言う (tell off)」である。ショック、痛み、怒り、フラストレーション、はずかしさすべてが蹴るというアクションに集約されている…。

というわけだが、文句を言うというアクションと、蹴るというアクションという二つのアクションがあり、どうして、「文句を言う」がアクションなのかわからない。何らかの感情が伴わないと成立しない行動と、ただの行為とを分けるということなのだろうということが察せられてくるのだが、このあたりが、とりわけ日本人が苦手とするところかもしれない。このようなエキササイズを繰り返せば、だんだん見えて来るものなのか…。

ともあれ、このようなエキササイズを繰り返す際に手助けとなるのが、「アクション動詞のリスト」なるものである。とりわけ、一緒くたにしがちな感情と行動を区分するには役に立つ。

例えば、

I enjoy	私は楽しむ	I relax	私はくつろぐ。
I belong	私は所属する。	I regret	私は後悔する。
I despair	私は絶望する。	I question	私は質問する。
I condescend	私はへりくだる。	I sulk	私はふくれる。

I blame	私は責める。	I postpone	私は延期する。
I suffer	私は被る。	I divulge	私は秘密をもらす。
I flirt	私は浮気をする。	I gloat	私は得意げに眺める
I reject	私は拒絶する。	I seduce	私はそそのかす。
I insult	私は侮辱する。	I observe	私は観察する。
I tease	私はからかう。	I remember	私は思い出す。
I wait	私は待つ。	I punish	私は罰する
I reveal	私は暴く。	I shrink	私はしり込みする。
I provoke interest	私は関心をひきたい。………		

(エキササイズ 3)

1. 一人の生徒が教室からでて、リストから一つの動詞を選ぶ。
2. その生徒が教室に入り、本を手にし、読み始める。
3. 生徒は自分の選んだアクション動詞を伴って、本を読むという状況を想像して、演じる。
4. 他の生徒たちは観客として、そのアクション動詞が何かを探る。

ここまでは、一人の作業としてのアクションである。モノローグや一人芝居をやるにはこれでかなりのことができるだろう。しかし、ほとんどの芝居は、他者との関係性で成立する。だから次に、ペアでのエキササイズへつながり、そして、テキストを伴うエキササイズへと展開していく。

(エキササイズ 4)

1. 戯曲の一つの「ビット」をとりあげる。
2. 登場する人物それぞれの主たるアクション動詞を決める。
3. 個々の台詞のアクション動詞を決める。
4. 異なるアクション動詞を試し、最もふさわしいアクション動詞を探っていく。

まだまだ腑に落ち切っていないものの、少しずつ輪郭に近づいてきたようにも思う。だが、スタニスラフスキイ・システムというものは、というよりも演劇とは重層的なもので、断片を、一層を理解しても十分ではない。まだまだ遠い道のりを歩いていかなければ到達できないのだということを思い知る。少しずつこの道のりを歩いていくこととしよう。

(なかやまかおり / ドラマ教育アドバイザー)

編集後記

仙台のNPO法人ボランティアインフォの大藤多香子さんの案内で、はじめて被災地に向かいました。メルボルン大学で俳優トレーニングに携わるとともに、ICTを使って新しい形の演劇を模索するFish & Gameの芸術監督を務めるロバート・ウォルトンさんと一緒に。東京で暮らし、日々の日常、仕事に追われていると、いまだ進行形の原発問題にはそれなりに気をもむものの、地震と津波の被害はどこか映画の一部だったのではないかという気がして、自分自身に愕然としてしまうのですが、改めて「あの日何があったのか」「何を人々は失ったのか」を心に刻むことができました。前にも書きましたが、記憶にとどめるのも演劇が担うべき役割の一つ。また、遠く長いものになるであろう再生復興の道を側面から支えていくことも、演劇の役割なのではないか…。津波に家を根こそぎ流された土地に育ち始めた雑草のなかに美しく咲く花々を見つけました(写真中は石巻の住宅跡に咲いたすみれ。右は、漁村の船越地区の海辺に近いところに咲いていたアイリスです)。生命の営みは、尽きたりはしない。

宮城から戻ったその足で、ウォルトン先生とともに、6月5日、「モバイル・シアター 演劇とICTのコラボレーション」と題したささやかなセミナーを開催しました。5月中旬になって開催が決まったため、ほとんど広報もできなかったのですが、幅広い分野からほぼ定員の参加者を得ることができました。「演劇とはこういうもの」「こうでなくてはならない」という思い込みを突き破り、演劇と観客の新しい関係性を拓く可能性をもつものと確信することができたように思います。わずか3泊の日本滞在で、宮城県石巻市他、被災した地域をまわり、またセミナーを担ったウォルトン先生のエネルギーとパッションに感謝するものです。次号でセミナーについてご報告する予定です。(中山夏織)



特定非営利活動法人

シアタープランニングネットワーク (TPN)

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リンクを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

THEATRE & POLICY シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)されています。定期購読をご希望の方は事務局までご連絡下さい。

発行 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク 発行人 高山 敦司 編集人 中山 夏織

〒182-0003 東京都調布市若葉町1-33-43-202 Tel & Fax (03)5384-8715 tpn1@msb.biglobe.ne.jp

http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn

「TPNファンド」

2012年4月、改訂NPO法が施行され、税制優遇の受けられる認定NPO法人化のための条件が緩和され、新たに「パブリック・サポート・テスト(PST)」が導入されました。PSTは、そのNPO法人が広く市民から支援されているかを判定するための基準と説明されていますが、具体的には、実績判定期間において、各事業年度に3,000円以上の寄付を100名以上から受けているかを問うものです。

TPNも認定NPO法人化をめざし、皆様のご寄付を頂戴いたしたく、ここにお願ひ申し上げます。ご寄付いただいた金額につきましては、独占的に、当法人の福祉領域における演劇・表現活動、ならびに、その研究に限定して活用させていただく所存であり、また、その金額ならびに用途につきましては当法人のHP、本誌において詳細をご報告させていただきます。

★ご寄付の方法について★

摘要欄に「TPNファンド」とご記載のうえ、郵便振替口座へご送金くださいませ。

郵便振替口座

00190-0-191663

1口 3,000円

何卒よろしくお願ひ申し上げます。